

原著論文

戦没オリンピック・有本彦六のライフヒストリー：
体操競技をめぐる指導理念—「日体スワローの魂」の形成とその実践¹

関 口 雄 飛（オリンピックスポーツ文化研究所）²

福 井 元（スポーツ文化学部）³

Abstract

This study aims to clarify the life of Hikoroku Arimoto and examine the type of “Spirit of Nittai Swallow” he left behind.

Arimoto was influenced by his teachers and seniors at Nippon Sport Science University (NSSU) in the athletic department of Kinomoto Junior High School and went on to NSSU. Immediately after joining NSSU, Arimoto did not consider that he would be able to compete in the 1936 Berlin Olympics. However, he was selected as a member of the Japanese national team for the Berlin Olympics because of repeated rigorous practice. At the Berlin Olympics, he finished 9th overall in the team competition. However, Arimoto was determined and confident to compensate for the Berlin Olympics at the next Olympics in Tokyo in 1940. Based on his experience at the Berlin Olympics, Arimoto modified his training strategy. Arimoto began well at the Tokyo Olympics by winning championships (hanging rings) after returning to Japan. However, because of the Sino-Japanese War, the Tokyo Olympics were canceled, and Arimoto’s goal was lost. Thereafter, Arimoto devoted himself to coaching NSSU gymnastics team members. Arimoto had a happy life surrounded by his students, close friends, and a loving family who adored him. However, those days came to a sudden end. On July 1, 1943, Arimoto was drafted into the Imperial Japanese Navy, and on April 25, 1945, he met a tragic end as a naval sub-lieutenant in the waters north of Taiwan. He was 29 years old—a promising gymnastics coach with a bright future.

Arimoto’s philosophy of coaching gymnastics - “Spirit of Nittai Swallow” was not an attitude of desire for the status of gymnastics or the pursuit of external form. It was an attitude that faced gymnastics with sincerity, grasped the essence of the sport proactively and voluntarily, and pursued technical improvements by securing an overwhelming amount of practice.

抄録

本研究は、有本彦六が生きた足跡を明らかにし、彼が残したという体操競技をめぐる指導理念—「日体スワローの魂」が如何なるものであったのかを考察することを目的とした。

有本は、木本中学校の競技部（いわゆる陸上部）で日本体育会体操学校（以下、体操学校と省略する）

¹ Life History of the War-dead Olympian Hikoroku Arimoto: Coaching Philosophy of Gymnastics—The Formation and Practice of the “Spirit of Nittai Swallow”

² Yuhi Sekiguchi, Research Institute for Olympic and Sport Culture

³ Gen Fukui, Faculty of Sport Culture

出身の教諭や先輩に影響を受けて同校に進んだ。体操学校入学直後、彼は、1936年ベルリンオリンピックに出場できと思っていたが、猛練習を積んだ結果、日本代表に選出された。ベルリンオリンピックでは団体総合9位の成績に終わったが、彼は、次回1940年東京オリンピックでベルリンの雪辱を果たす決意とその自信を有していた。有本は、ベルリンオリンピックでの経験をもとに練習方法の改革を考えていた。また、帰国後の大会（吊環）では優勝し、東京オリンピックに向けて幸先良いスタートを切っていた。しかし、日中戦争の影響で東京オリンピックが返上され、彼の目標も失われることとなった。有本はそれ以降、器械体操部員の指導に力を注いだ。彼を慕う学生、親友、そして、愛する家族に囲まれて、幸せな日々を送った。だが、その日々も突如として終りを告げた。1943年7月1日、有本は、大日本帝国海軍に応召、1945年4月25日に台湾北方海上で海軍少尉として無念の死を遂げたのである。29歳、前途有望な体操競技の指導者であった。

有本が残した体操競技をめぐる指導理念－「日体スワローの魂」とは、体操の地位を欲望したり外形を追求したりする姿勢ではなく、それと真摯に向き合い、主体的かつ自主的にわざの本質を捉え、かつ、圧倒的な練習量を確保することによってその技術向上を追究する態度であったといえよう。

Keywords: War-dead Olympian, Gymnastics, Berlin Olympics (1936) , Spirit of Nittai Swallow

キーワード：戦没オリンピアン、体操競技、1936年ベルリンオリンピック、日体スワローの魂

はじめに

日本体育大学東京・世田谷キャンパスでは、毎年春に一本の桜木が綺麗に花を咲かせる。麓には、「魂」と書かれた第二次世界大戦における戦没同窓生の慰霊碑が置かれ、その碑詩は、「英霊よ、茲に安らかに眠り、後進が精進の姿を眺め、本学の光輝ある発展を加護照覧あらんことを」という一文で結ばれている。戦後70年目を迎えた2015（平成27）年以降の毎年8月には、碑前で慰霊式が举行されるようになり、戦没同窓生への追悼と世界平和への祈りが捧げられている。今日、慰霊碑は、「スポーツの持つ様々な『力』を活用して、国際平和の実現に寄与する」という日本体育大学の宣誓を象徴するモニュメントとなっている（写真1）。

この慰霊碑が建立されたのは、米本卯吉理事長・栗本義彦学長体制下の1958（昭和33）年のことであるが、実はその2年前にも、とある戦没同窓生の慰霊が行われている。その発端は、「体操ニッポンの名声」が世界に轟かされた1956年メルボルンオリンピック閉幕後の偶然であった。三重県熊野市の陸上競技団体である



写真1. 慰霊碑
撮影：筆者（関口）

オーシヨンプラブ会長・浜田潔は、同じ熊野市出身で、岡山県立勝山高等学校教諭として勤務していた北出昇に再会し、次のような提案を行った¹⁾。

有本君は、[1936（昭和11）年の]ベルリンのオリンピック大会に出場しながら不幸戦死したまゝ、折角の優秀な技量（氏は片手倒立の天才と言われた）も世に現われる事なく埋れているのは残念だから、後輩の諸君が、メルボルンで日章旗を挙げ体操日本の存在を示したこの機会に一行に来て貰って何とか故人の功績を世に出して貰おうじゃないか。

浜田が名前を挙げた「有本君」とは、日本体育会体操学校（現、日本体育大学）入学後、同校器械体操部に入部、その後、片手倒立という技を日本で初めて完成させて1936年ベルリンオリンピックに出場した有本彦六のことである。有本は帰国後、「スワロークラブ」（現、日体スワロー）の結成に携わり、クラブ黎明期の指導者として体操ニッポン誕生の立役者を数多く育成し、その「生みの親」²⁾とまでいわれたものの、わずか29歳という若さで海軍少尉として戦場に散った、戦没オリンピアンである。

北出と有本はともに熊野市出身で、木本中学校（現、木本高等学校）を卒業後、日本体育会体操学校に進学した先輩後輩の間柄であった。北出は、1957（昭和32）年早々に、有本と器械体操部時代の同期生で日体

スワロー副部長でもある松本徳一に話を持ち掛けた。松本は、有本との関係を、「私は、彦やん（故有本氏の愛称）とは〔日本体育会〕体操学校の同期で、然も、親友の間柄でした」と述べている。松本はそのうえで、「今度の墓参も、メルボルンの派遣選手が決定した〔日体スワロー〕総会の席上で私が発言し、実現しない時は私が〔日体〕スワローを脱退する、とまで言い出した程でした」と、日体スワローを強く説得したことを証言している³⁾。続いて、日本体育大学の理事会でも選手派遣に関する決議が諮られ、それが「快諾」された⁴⁾。

これらの決定を受けて「来市に奔走した」北出は、1957（昭和32）年2月に熊野市を訪れ、市側と詳細な打ち合わせを行った。北出と松本を中心とする準備委員会では、3月12日に町内の旅館で打ち合わせを行い、4月3日に木本町・称明寺での慰霊祭と木本高等学校での競技会を実施することを決定した⁵⁾。後日、『南紀新報』が報じるように、選手団の来訪は、北出の「なみなみならぬ尽力」と松本の「運動によるもの」であった⁶⁾。

4月2日午前7時には、発起人の北出と一行の監督を務める松本が先発隊として熊野市に入り、オーシヨンクラブ幹部と当日に関する打ち合わせや設備の下検分を行った。午後3時には、有本の教えを受けたコーチの中島想知、マネジャーの上迫忠夫、選手の竹本正男のほか、同じく選手の池田睦彦、河野昭、寺井勝見、相原信行、田中敬子、霜村道子、上野栄子が熊野市に到着した⁷⁾。松本はその後、選手団を引き連れて有本の墓参りに向かい、墓前に立つや否や「彦やん」とよびかけたまま声をあげて泣いた。選手までもが涙をみせ、同行したオーシヨンクラブのメンバーも声を呑んだほどであった⁸⁾。

翌4月3日午前10時半には、松本をリーダーとする選手団が木本町・称明寺での追悼会に出席した。追悼会には、有本の親族はもちろん木本町及び学校関係者なども数多く参列した⁹⁾。木本小学校及び木本中学校の同級生代表として「追悼の辞」を読んだ糸川清という人物は、有本を、「君は、資性温厚の中に果敢不屈の気概を蔵し、常に級友の信望を集め、将来有望なる人物として敬愛されていた」¹⁰⁾と称えた。また、「慰霊辞」を読んだ松本は有本を次のように偲んだ¹¹⁾。

兄は、性、俊烈にしに寡黙、常に自己を信じ、実行力に富み、上に阿諛せず、教育者として、又、スポーツマンとして洵に高潔な人格の持主であった。生前兄の学生後輩に残した教訓は実に偉大であった。…中略…今日、日体スワローが世界的に有名な監督、コーチ、…中略…オリムピック選手、…中略…其の

他幾多の俊才を輩出し得たのも兄の残した日体スワローの魂なるものが我々の身霊に滲透しているものであって、君の魂は我々と共に尚生きていることを絶叫したいのである。

午後1時から木本高等学校グラウンドでの追悼競技会へと移ることとなるが¹²⁾、日本体育会体操学校時代の旧友や地元関係者にその早逝を惜しまれた有本は、どのような人生を歩んだのだろうか。有本が残り松本らに浸透しているという「日体スワローの魂」とは、いったい如何なるものだったのだろうか。

これらの問いを解き明かす作業は、体操ニッポンを長らく牽引した日体スワロー出身者に脈々と受け継がれてきた精神の一端を詳らかにするものである。にもかかわらず、従来、有本の生涯に関しては、戦没オリンピックの一人として数えられたり¹³⁾、断片的なエピソードが紹介されたりしている以外¹⁴⁾、全く明らかにされていない。

以上の問いと研究状況を受けて本研究は、有本が生きた足跡を明らかにし、有本が残したという「日体スワローの魂」が如何なるものであったのかを考察することを目的とする。

なお、引用文中の〔 〕は全て筆者の挿入とし、判読不可能な文字については●と表記した。

1. 1936年ベルリンオリンピックへの道のり

1-1. 木本中学校への入学と競技部での活動

1915（大正4）年10月11日、有本は父・荒太郎、母・きくの、姉4人の末っ子長男として三重県南牟婁郡木本町（現、三重県熊野市）に生まれた¹⁵⁾。「無口な」荒太郎は和歌山市有本地区の出身で木本代官所に勤務、退職後「大正湯」という風呂屋を開業した。大正湯は、漁業が盛んな牟婁郡親地町で「大入満員の繁盛」であった¹⁶⁾。1928（昭和3）年3月には木本小学校（以下、木小）を卒業、同年4月に木本中学校（以下、木中）に入学した（写真2）。1928（昭和3）年度の木中は、入学志願者数が103名だったのに対し、入学人員は84名であった。1年次の同級生は80名、5学年の総数は330名であった¹⁷⁾。木中運動部には、剣道部、柔道部、野球部、蹴球部、庭球部、水球部、登山部、球技部、射撃部、相撲部、そして、競技部（いわゆる陸上部）があった¹⁸⁾。

有本が入学する以前の競技部では、1920（大正9）年4月の開校と同時に体操科教諭として木中に赴任した、日本体育会体操学校（以下、体操学校）卒の加藤譲が初代部長として「非常に熱心に指導」を行ってい

た¹⁹⁾。1921（大正10）年度の木中卒業生の回顧によれば、加藤は「運動競技に万能振りを発揮されて吾々を驚嘆させ」ていた²⁰⁾。加藤は1923（大正12）年4月に東京府立第八中学校（現・都立小山台高等学校）へと転任してしまうが²¹⁾、2年後の1925（大正14）年4月からは、加藤と同じく体操学校卒の加知正己が体操科教諭として木中に赴任、競技部三代目部長に就任した²²⁾。1920（大正9）年以降有本が卒業するまでの約10年間に、体操学校出身の体操科教諭2名が部長を務めた木中競技部からは、1926（大正15）年度に1名、1929（昭和4）年度に2名、1931（昭和6）年度に1名の生徒が体操学校に進学していた²³⁾。1929（昭和4）年度の卒業生は、「加知先生は鉄棒がお得意であったと見えてよくやらされるし、又、よく流行しました」²⁴⁾と、加知の指導とその影響力を証言している。

この雰囲気の中で有本は、10余りの運動部のなかから競技部を選んだ（写真3、4）。競技部の同級生によれば、有本は「休憩時にはハードルをならべてその細い器具の上で倒立をしたり、〔鉄棒で〕大車輪をやってほかの生徒たちを驚かせたり、感服させてくれた得難い技の持主」であった²⁵⁾。また、有本と同級生の峪口時寛という人物の回顧によれば、彼のひとりとは、「真面目で、下級生から尊敬され、教師からは

信頼される人物」であった²⁶⁾。この証言は、有本が1932（昭和7）年4月に5年生に進級した後、競技部主将に就任していることにも裏付けられている。また、同級生は1年次に80名だったが、2年次には75名、3年次には66名、4年次には57名、そして5年次には52名まで減少していった²⁷⁾。5年間で3割5分の生徒が落第したなかで有本が最終学年まで進級を果たした事実からは、彼が如何に文武両道を成し遂げる人物であったかが分かる。

8月下旬には、三重県中等学校競技大会に向けて競技部部長の加知、OBの畑中小四郎、中垣内忠という何れも体操学校の卒業生ないし在学学生による指導を受けつつ、約1週間にわたる「午前午後の二回猛練習」が行われた²⁸⁾。この練習の成果もあって有本は、9月25日の木中と新宮中学校の陸上対抗競技会では、1500mを5分16秒で走り1位になった²⁹⁾。また、11月1日の木中の第12回陸上運動会では、100mハードルを13秒7で走り「新記録」を叩き出した³⁰⁾。木中競技部史上、「非常に多忙で」「其の成績も見るべきもの〔が〕多」い「充実した年」を過ごした有本は³¹⁾、1933（昭和8）年3月に木中を卒業し、進学先として初代及び3代目競技部部長とOB4名の先輩の母校・体操学校（高等科）を選んだのである。



写真2. 木小時代

提供：駅前・木本町まちづくり推進委員会



写真3. 木中競技部時代

提供：駅前・木本町まちづくり推進委員会



写真4. 木中競技部時代（右端）

提供：駅前・木本町まちづくり推進委員会

1-2. 日本体育会体操学校への入学と器械体操部での活動

有本が入学した1933（昭和8）年の体操学校は東京府荏原郡大井村にあった（写真5）。体操学校は、旧態依然たる施設しか無く、手狭になった校地に多数の学生を収容しなければならないことや、新時代に即応しうる体育指導者養成のために教育水準の向上を図ることを課題として掲げていた³²⁾。また、同年は、日本の体操競技チームが1932年ロサンゼルスオリンピックに初参加した翌年であった³³⁾。教官の佐々野利彦は、その一員として日本人最高順位を記録し、「一つでも大会で見た技を身につけよう」とロサンゼルスからの帰りの船でも練習に励んだ人物で³⁴⁾、学内では、「革

のジャンパーを着て颯爽として」いたという³⁵⁾。

有本はその佐々野が監督を務める器械体操部に入部した。同期はといえば、新潟・高田中学校出身の曽根道貫、愛媛・松山商業学校出身の日野一正、岡山・津山中学校出身の松本徳一であった。有本に誘われて器械体操部に入部した松本によれば、体操競技を「こよなく愛し」³⁶⁾、「希望に燃えている」彼は、松本をよく練習に誘った³⁷⁾。有本は5尺1寸3分（155cm）程、曽根は4尺9寸（148cm）程³⁸⁾と身長が低かったために、2人は、徴兵検査で不合格になると決め込んで「教練を徹底的にサボり、放課後の練習に精力を蓄えていた」³⁹⁾。有本や曽根はそれくらい体操競技に懸けていた。

この時期の体操学校には屋内体操場がなかったために、放課後の練習は、昼間が屋外で、夜が柔道場で行われた。東京在住の木本町人会メンバーのひとりとは、ある昼間の有本の練習振りを見学して、「ほんとに汗と脂を絞って〔佐々野利彦〕監督に叱られながらやってるよ。朝六時―十二時、午後一時―四時までギウギウ絞られているよ」⁴⁰⁾と述べている。松本によれば、夜の練習は、柔道部の練習が終わった午後8時頃に道場に器具を運び込んで夜中まで続いた⁴¹⁾。まさしく、「血の出るような練習」であった⁴²⁾（写真6）。

2年生に進級した1934（昭和9）年7月30日には、2年後の1936年ベルリンオリンピック第1次予選会が東京市立第一中学校体育館で開催され、25名が選抜された⁴³⁾。体操学校からは、1929（昭和4）年卒で前回ロサンゼルスオリンピックメンバーであった佐々野利彦や武田義孝、1933（昭和8）年卒の三宅芳夫、1934（昭和9）年卒の金井忠男、翌1935（昭和10）年卒予定の曾根、日野、有本という8名が選出された⁴⁴⁾。8月12日からは、文部省菅平高原体育研究場で2週間に及ぶ合同合宿が行われた。有本は参加しなかったようであるが、この合宿に参加した日本代表の遠山喜一郎によれば、「高原とはいえ真夏の、しかも炎天下の練習は相当なもの」であった⁴⁵⁾。後年、松本は、体操学校在学中の有本について、「兄が学生時代に練習中、負傷のため片手が使用不能となった時、使える片手をもって現在の片手倒立を日本で初めて完成したことも、〔彼が〕如何に努力の人であり、如何に熱の人であっ

たかを物語るものである」⁴⁶⁾と評している。

1935（昭和10）年3月、有本は体操学校高等科を卒業した（写真7）。卒業後、有本と曾根は高等科を卒業し勉学継続を希望する者のために1年の在学年限で設置された研究科⁴⁷⁾で、日野と松本は代々木上原の文部省体育研究所で練習を行った。3年前の1932（昭和7）年4月には教官の佐々野も、ロサンゼルスオリンピック出場を目指す只中で卒業となったために研究科に進んでいた。体操学校では、オリンピックに向けて体操競技を磨くことができる環境が整備されていたのである。

松本によれば、文部省体育研究所では、時々練習会が行われ、ベルリンオリンピック予選会に残っているメンバーはその出場を目指して「猛練習」を行っていた。練習参加者は、「人目につかないように」新技に磨きをかけていて、自分にしかできない技を持つために「汲々と」していた。先輩が後輩に技を教えることはほとんどなかった⁴⁸⁾。1935（昭和10）年7月30日には、ベルリンオリンピック第2次予選会が東京市立第一中学校で開催され、参加者31名中16名が選抜された。有本は31名中の6位で、体操学校からは前回同様の8名が選出された。8月12日から24日には、文部省菅平高原体育研究場で合宿が実施され、有本も参加した（写真8、9）。また、10月11・12日、翌1936（昭和11）年1・2・3月の第2・第4土曜日にも文部省体育研究所で2時間の合同練習会が実施された⁴⁹⁾。



写真5. 体操学校の校舎
出典：「昭和10年度卒業アルバム」



写真6. 器械体操部（3列目左端）
出典：「昭和10年度卒業アルバム」



写真7. 在学時
提供：駅前・木本町まちづくり推進委員会



写真8. 第2次菅平合宿（1列目右から3番目）
所蔵：オリンピックスポーツ文化研究所



写真9. 第2次菅平合宿での片手倒立
提供：駅前・木本町まちづくり推進委員会

2. 1936年ベルリンオリンピック体操競技日本代表選手への選出

1936（昭和11）年3月、有本は体操学校研究科を修了し、代々木にある文部省体育研究所の研究生となった⁵⁰⁾。4月11・12日には、ベルリンオリンピック第3次予選会が東京市立第一中学校体育館で開催され、約30名中15名が選抜された。有本は11位で、体操学校からは一後進の指導に専念するべく第2次予選会後に選手生活を引退した佐々野を除く⁵¹⁾一7名が選出された⁵²⁾。1か月後の5月9・10日には、ベルリンオリンピック最終予選会が東京市立第一中学校体育館で開催された⁵³⁾。有本の甥によれば、有本の姉3人は、彼のベルリンオリンピック出場を「泊の観音様に願かけ、早朝より御百度参り」していた⁵⁴⁾。有本は、一怪我の影響で第3次予選会後に辞退した日野を除く一最終予選会に残った14名のなかで「郷土の興望を荷つて奮闘」した。鉄棒では、「不幸にも脚部に捻挫を起し痛さに耐えかねる様であった」ものの「熊野男児の面目を発揮」し、全種目（徒手、吊環、鞍馬、平行棒、鉄棒、跳馬）で「いずれも美事な出来栄え」を披露することができた⁵⁵⁾。予選会終了後、詮衡委員会が開かれ、代表選手8名が選出された。体操学校からは武田義孝、三宅芳夫、曽根道貫、そして、有本という4名が選ばれた⁵⁶⁾。この知らせを受けて、有本を応援するために「はるく」木本町から上京していた町議の叔父・戸谷金重は、東京在住の親戚や木本町人会のメンバーらに取囲まれ「『お目出度うく』の一斉射撃」を受けた。戸谷によれば、有本は「謙虚な口調」で最終予選を次のように振り返ったという⁵⁷⁾。

どうも、余んまり芳しくない成績で面目もありません。しかし日本代表に選ばれました以上は一生一代の榮譽のために、来るベルリンの大会では石に噛りついても勝たねばなりません。鉄棒で足に傷つきました時は、この傷で失敗したら皆様に申し訳ないと思ひましたが、次の跳馬の時には、この怪我のために助走にあたって力を適当にセーブすることになり、却て結果はよかった様な訳でホッとしました。怪我は大したこともありませんからどうか御心配なく。

有本は、鉄棒での捻挫が悪い結果をもたらさないか心配したものの、続く跳馬の助走では足を痛めた影響でむしろスピードを抑えることができ、良い結果（6位／14人）へと繋がり「ホッと」していた。

選手詮衡委員の高木武夫は、第3次予選会を第11位で通過した有本は、「文字通り寝食を忘れて、猛練習

を続けた。其熱は技術を異常に伸ばし、遂に代表選手の名譽を克ち得た」と彼の頑張りを評価した⁵⁸⁾。同じく選手詮衡委員の栗本義彦も、有本は「第三次大会には十位以下であつたが必死の意気すごく代表となった。この意気で更に伯林までに猛練習をつむならば佐々野〔利彦〕選手に似たタイプと頑張りがきくから、日本代表の中堅どころの実力を発揮するまでに進境を見せてくれるであろう」⁵⁹⁾と期待を寄せた。有本自身は、日本代表に選出されるまでの道のりを、次のように振り返る⁶⁰⁾。

オリムピック第一次予選があつたのは〔1934〕（昭和九）年七月で、私は体操学校在学中だったので、其の当時はオリムピックに行けるなんて夢にもしなかったのです。予選が有ると聞いて私も出場致さうと、体操学校の諸先生及び同級生と共に練習いたしまして、試合の結果予期しない成績にて入選いたしました。そして、菅平で前のオリムピックの選手と共に合宿し練習する。唯々それだけでも名譽のやうに思つて飛び立つ程嬉しかったのです。次いで第一次予選、第二次予選と共に合格して今度最終予選にて不図ずも入選し得る事が出来ました。

日本代表として晴れの伯林に出場出来ると思つても半信半疑で、唯々夢のやうに感じます。然し、五月十日の最終予選の日を私はどんなに待ち遠しく思つたり、又、一方では遅く来れば練習も永く出来ていいのにと想つたり致しまして、その日が近づいて来るのを何んとも言へない気持〔ち〕で猛練習をつづけたのでした。

さて、此度の喜びを迎へて、私は、諸先生及び先輩諸氏の熱心なる御指導の賜と深く感謝いたしてをり、又、予選に落ちた人に対しては気の毒に思つて居ます。伯林に行ったならば、ベストを尽して我が日本の為めに、又、我が日本の体操界の為めに大いに尽し、仮令、技術に劣っている所が有つても、其の意気、態度に於て帝国代表に恥ぢない行動を取つて、堂々と闘ふ覚悟です。

有本は、体操学校2年次にベルリンオリンピックの予選が実施されると聞いてその参加を決めた。当初はオリンピックに出場できるとは「夢にも」思っていなかったが、体操学校の教官である佐々野や同期3名とともに「猛練習」を重ねた結果、第1次予選を通過することができた。はじめは前回1932年ロサンゼルスオリンピックの選手とともに練習ができるだけで「飛び立つ程」嬉しがっていたものの、第2次、第3次予選を通過したことで次第に代表入りへの想いが強くなっ

ていったと思われる。有本は、最終予選当日を前に、いっぽうで待ち遠しく、もういっぽうでそれとは異なる相反した気持ちで練習を続けた。遂に日本代表に選出された有本は、世話になった人々への感謝を口にすると同時に、同じ釜の飯を食い、夢を追いかけてきた教官の佐々野や、同期の松本、日野などの落選した者も慮った。そして、日本とその体操界のために力を尽し、たとえ技術で劣ったとしても、代表に恥じない意気込みと態度で「堂々と闘ふ覚悟」を誓った。有本の代表意識は、2年弱という短い期間に急速に醸成されていったのである。

3. 木本町への帰郷と地元民の歓迎

有本が「世界の檜舞台に活躍する事」となった吉報は、郷土である木本町を歓喜させ⁶¹⁾、木中や同窓会等からの「祝電の雨」を降らせた⁶²⁾。代表メンバーは、1936(昭和11)年5月15日に朝日新聞社招待体操大会に出場し⁶³⁾、5月21日～6月9日に文部省体育研究所で最後の合同練習を行い、6月20日に東京発シベリア経由でベルリンに向かう予定となった⁶⁴⁾。

5月14日には叔父の戸谷が木本町に戻ったが、町は「狂喜と感激に渦巻」いた。特に、木中の「感激は一入」であった。戸谷は、有本が代表に選出されるまでの親族の心境と彼の現在の様子を次のように報告する⁶⁵⁾。

各方面の方々に色々と御心配を煩はしましたが、お陰で晴れの選手の一員に加はった事はせめて皆様の御声援に添ふ事が出来ると本人も非常に喜んでいきます。何しろ沢山の選手の中から選り選りしてゆくのですから、私共も実はその結果に一つの不安をさえもっていましたが、本人はあの通り元気で、何でも仲間の一人に入らなければといふ気魄があったので、幾らかは安心するところもありましたが、選手として正式に決定するまでは全く不安と焦燥にかられてゆきました。幸ひ疾患部も軽微であり大した事はありません。これとても在京有志の方々や郷土の皆様方の御支援の賜物に外ありません。

戸谷によれば、有本は元気であり絶対に代表選出を果たすのだという気魄があったので、親族としては「幾らかは安心」していたが、やはり代表メンバーが確定するまでは「不安と焦燥」に駆られていた。また、有本は、代表メンバーへの選出を、木本町民の声援に応えることができると「非常に喜んで」おり、足に負った捻挫の程度も軽く済んだ。戸谷は、東京在住の木本町人会や木本町民の支援に対し感謝の言葉を伝え

ている。

「世界的スポーツマンを出した母校」木中同窓会では、5月末、有本が6月上旬に木本町に帰ってくることになったため、「歓送茶話会」を開催することが決まった⁶⁶⁾。そして、6月7日午後2時30分、有本は、叔父の戸谷とともに木本港着巡航船で木本町に帰ってきた。日曜日にもかかわらず、木本海岸には木中校長の國保護や同中生徒が集い、町民の歓声が「海浜を揺が」した。巡航船から降りた有本は、「皆様の御蔭でもって幸ひ選手の末席を汚すことになりました。祖国日本のため郷里のため全力を傾け御期待の万分の一に応へたい決心であります」と挨拶し、木本神社で参拝を行った後、自宅へと戻った。「実家にくつろいだ」彼は、伊勢新聞社の取材に対し、ベルリンオリンピックへの決意を、次のように述べる(写真10)⁶⁷⁾。

器械体操はオリンピック大会競技種目としては新しく、日本がこの種目を加えたのも最近であり、相当各国選手との戦ひは苦心が入ることゝ思ひますが、日本のため、又、故郷のため皆様の御期待にそむかぬ様大いにがんばるつもりです。機械体操選手としては最年少者で先輩諸選手の指導に依り日本の名誉にかけても腕のつくかぎりになゝかって来ます。東京出発は六月廿日陸路シベリヤ経由で七月三日ベルリンに到着の予定です。

有本は、紀南新報社の取材に対しても、その決意を、「頑丈な小軀を揺ぶりつゝ」詳細に語る⁶⁸⁾。

盛んな出迎へをうけて全く面喰ひました。幸ひに選手の一人に加へられた事は先輩の指導と、一つは郷党の皆様御蔭である事を深く感激しています。皆様の御期待に添ふ事が出来るかどうか？自分の考へとして全精魂がうち込んで祖国のために活動したいと念願しています。陸上、水上ともに日本の存在は各国の注視的となっていますが、我々の体操部は今年が二回目であって、スイス、フィンランド、イタリー、チェッコ、ハンガリー、パリといった先進国とどの程度の戦をするかといふ事が四年後の日本体操界にかけられた問題であって責任の重、且つ、大なる事を痛感しています。幸ひ選手中の先輩は何れも日本を背負って立つ第一〔人〕者ばかりで、末端の私としては非常に意を強くするもので、大いに頑張った日章旗を翻すべくベストをつくして来たい、それが只今の私の心境です。

体操競技日本代表がオリンピックに出場するのは2

回目で、先進国とどんな試合を行うかによって4年後の1940年東京オリンピックでの行末が決まるので、責任重大であることを有本は痛感していた。また、代表選手は皆日本を背負って立つ先輩なので、最年少の自分としては心強く、日章旗を掲げるべく全力を発揮していきたい、という気持ちを持っていた。彼の代表意識は、この時点で4年後のオリンピック体操競技日本代表チームの命運を背負うまでに拡大していたのである。

5日後の6月12日午後3時には木小に町民約1,000人が集まった。体育館では、有本による鉄棒と規定型徒手体操の演技が公開され、「縦横に揮ふ妙技」に拍手が送られた(写真11, 12)。午後4時には、木本町各団体共同主催の壮行茶話会が同町公会堂で催され、町会議員や学校、スポーツ団体関係者、町民など約500名が参加し「盛大に」実施された。木本町長や青年団長、紀南スポーツ団体代表、在郷軍人会会長、木本高等女学校長、木中校長等が代わる代わる有本を激励した。これに対し有本は、「紅頬に感激の涙をにじませ」つつ「オリムピック制覇の決意」を「力強く」述べた後、木本高等女学校同窓会より「花輪一基」を、茶話会一同より「金一封」を受け取った。参加者は、茶菓子を食した後、町長の主唱で有本に向けて万歳を三唱し、盛会のもとに解散した(写真13)⁶⁹⁾。

2日後の6月14日には、帰省以来、「ベルリンの空に想いを馳せて精進に精進をつづけていた」有本が、20日の出発を待つ選手団と合流するために午後2時30

分発の木本発巡航船で父・荒太郎らと東京へと発つ⁷⁰⁾。木本町上空は「初夏の陽光〔が〕さんく」と降り注ぎ、海上は「国際選手を送るにふさはしく」「波静か」であった⁷¹⁾。午後2時、有本の出発を知らせる号砲が3発「郷土の空に轟く」。木本町会は「同君の首途を祝福して会議を休止」し⁷²⁾、町長をはじめ1,000名を超える人々が歓送旗や日の丸旗を手に浜辺に集った。「祝出陣祝健闘！」が「へんぼんと海風になびく中」⁷³⁾、人々は、町長の発声で「陸の戦士、我等の有本選手を勝たせよ」と「万雷の万歳」を浴びせた。有本は、「皆様の御同情に酬ゆるべく向ふに行った上は日本のため郷土のため力あるだけに戦ひ、きつと日章旗を掲げて帰ります」と決意を述べた後⁷⁴⁾、伊藤興行部音楽隊の演奏で「華々しく出発」⁷⁵⁾、感激のあまり「男泣き」し、人々もその姿に「暫し感涙にむせんだ」⁷⁶⁾。

この見送りに参加した竹内宏二という町民は、後年、「ベルリンオリンピックに出場される有本さんを、木本の“脇の浜”まで大勢の人が送って行きました。当時、尾鷲方面から東京へ行く時は、そこから巡航船に乗って行ったものです。胸に日の丸マークを着けた有本さんは非常に格好が良かった。皆なに万才の声に送られて、ベルリンオリンピックへ出発して行った」⁷⁷⁾とその情景を回顧している。有本は、体操競技界に加え、木本町民の期待も一身に背負い、日本チームが待つ東京へと戻ったのである(写真13, 14, 15)。



写真10. 自宅でくつろぐ有本
出典：『伊勢新聞』
1936年6月9日付, p.3.



写真11. 木小での壮行会(2列目中央)
出典：『写真集：明治・大正・昭和：熊野』



写真12. 木小での演技
提供：駅前・木本町まちづくり推進委員会



写真13. 木本町公会堂での壮行会
提供：
駅前・木本町まちづくり推進委員会



写真14. 船出の瞬間
出典：『伊勢新聞』
1936年6月16日付, p.3.



写真15. 出国前の家族写真
提供：有本一美氏

4. 1936年ベルリンオリンピックへの参加

有本を含む体操チームは、1936（昭和11）年6月20日朝に明治神宮を参拝し、午前10時20分に「居並ぶ応援団の声援を跡にして」東京駅を出発した。翌21日午前6時45分頃に下関に到着した体操チームは、午前10時30分以下関港を出港、途中で釜山、奉天、新京を経由し25日に満洲里に到着した。満洲里からはシベリア鉄道の長い旅が始まった⁷⁸⁾。

汽車はソ連のチタに到着した。チタでは約2時間停車することになったので、選手団は駅に降りてそれぞれ「独特の練習」を始めた。周りにいたロシア人はその様子を「珍しいことの様」に眺めていた。体操チームも、「軽い徒手」を行った後、「手製のルーラー」を持ち出してきて平らな場所を選んで、「臂立伏臥」や「鞍馬」の補助練習等を行っていた。すると、見物していたあるロシア人青年が体操チームに歩み寄り「手真似」で何か伝えようとした。青年は「その機械をつかってよいのか」と尋ねてきたようであったので、体操チームが「よしとなづく」と、青年は一步前に進んで、「ルーラー」を使って「片手側立」などを試みた。「余程腕に自信がある」ようで左右に動く「ルーラー」の上で「平気で立たう」と試みていた。結果は不成功であったが、青年は「可成得意そう」であった。

やがて有本が「片手倒立」をやり出したので、他チームの選手も周りに寄ってきた。ロシア青年は「何と思ったか」有本に近づくと「見るまに」彼の手を取って両手で倒立をさせてしまった。体操チームのキャプテンであり体操学校の先輩である武田義孝は、あとで、ロシアを仮想敵とした「反共」思想が強まりつつある状況下でこの出来事は「不謹慎だった」と有本を咎めた。この騒動に対し、一連の出来事を見ていたコーチの本間は、有本は「実に咄嗟のハズミで」手

を取られ「考へるすきもなく」応じてしまったのであって、「その時の勢としてさして問題にすべきものとも思へなかった」ので、「双方をなだめ」るにとどめた。本間は、意図せざるこの「国際的事件」は、「運動を愛好する人々の間に流れる真情の発露として看過し難いものゝ様」に思えたとし、世界の注目の的になっている「労農ロシア青年間の体育的な動き」の一つとして、「何かなしに愉快に感じた」と語った⁷⁹⁾。この事件は、体操学校を卒業して間もない有本のあどけなさ、彼にとって体操競技を通じた初めての国際交流の経験になったことを示している。

7月3日午前11時、選手団150名を乗せた列車は、ドイツ・フリードリッヒ駅に到着した。選手団は、主将の竹内悌三（蹴球チーム）を先頭にして「堂々プラットホームに整列」、大会会長のレワルトら数百名に「物凄い歓迎振り」で迎えられた。選手団は7台のバスに分乗しアレキサンダー広場の市庁舎へと向かい、市行政長官の歓迎を受けてポート、ヨット、女子選手はそれぞれ別の宿舎に、その他は先着の僚友に迎えられてオリンピック村に入った⁸⁰⁾。入村4日後の7月7日、有本は、母校・木中校長の國保護宛てに次のような便りを送る（写真16）⁸¹⁾。

拝啓 在郷中は格別の御情と熱烈なる応援を忝うし有難く深く感謝いたして居ります。黄塵万丈のシベリア旅行十日の難行も終へて七月三日ベルリンに着き、すぐオリンピック村に入りました。村はとても立派で、何から何まで新品でピカく光っています。村は後日兵舎になるのだそうです。軍人は元気で躍進ナチスを物語っています。では失礼します。（七月七日ベルリンオリンピック村にて 有本彦六）

有本は、木中校長の國保に対し、オリンピック村に入るまでの旅程や、村の内情を報告している。9日後

の16日には、紀南新報社を通して故郷・木本町宛てに次のような便りを送る⁸²⁾。

故郷の皆様、長らく御無沙汰致しまして誠に申し訳ありません。私共も十日間の長い旅行で不便な、そしてまた砂嵐の多いシベリアを通過いたしまして〔七月〕三日にベルリンへ、そしてオリンピック村へ、落ちつくともなく十日に私ども体操部だけがハンガリーに出発致しまして首都ブダペストにて試合を行ひ、向ふの選手の上手なものには驚き、また非常な参考になりました。

それから音楽の都ウィーンへ、十四日はチェコスロバキヤに、プラーク〔すなわちプラハ〕において選手の体操を見学いたし、日本の選手に似た練習をするのを見まして新たな感にうたれました。

十五日の夜ベルリンのオリンピック村に着きました。三国も見学致しますと大旅行でもしたやうに想はれますが、五、六時間も有れば他国の国境ですから大したことはありません。体操で一番強いスイスを見学することの出来なかったのは残念です。この旅行中ハンガリーが一番感じが好く我が日本を非常に尊敬致しています。では皆様失礼致します。さよなら。（二伸）紀南新報社の皆様いろいろお世話になります。

有本は、ハンガリーの選手が披露した技術に驚くとともに学んだ。日本チームは428.3対443.2で敗れたものの、彼は主将の武田と日本人同率1位となり⁸³⁾、「優勝旗を授与」された⁸⁴⁾。また、チェコの体操を見て彼が「新たな感にうたれました」と述べたのは、コーチの本間によればハンガリーとの試合で敗れ「迷はんとしたものが、その夢よりさめ」「再び自己〔すなわち日本〕の長所を認識」したという意味であった⁸⁵⁾。

8月3日には、紀南新報社の記者が「両親を初め家族一同その日の快報を待ち遠しく戦く胸を押さえて神かけて祈る」有本の実家を訪れた。叔父の戸谷は、「極めて健康であるといふ便りに一同意を強うしています。果して皆様の御期待に添ふことが出来るかどうかこの点本人も非常に気にしているらしいが、身体の調子がよいといふので大抵の成績をあげるだらうと予想しています」⁸⁶⁾と期待を寄せた。

器械体操第一日目（平行棒、跳馬、徒手、鞍馬、吊輪）、10日の木本町内は、「オリンピックに向ける南紀民の神経そゝり立つまでに」「えらいラヂオへの関心ぶり」であった。「暑さもなくそもあるかい」、「今日の放送を聞かぬやうなものは木本の人間と言へるかい」との声が発せられ、町は、「下手な口の利き方を

すればそのまゝにしないといふやうな緊張ぶり」であった。木小、木中関係者、木本町民の期待は「刻々スピードをはづんで」いった。町は、「我等の気を鼓舞するため健闘を祈る」という「激励電報」を送った⁸⁷⁾。日本チームの成績は、第1位のドイツ、第2位のスイス、第3位のフィンランド、第4位のチェコスロバキア、第5位のユーゴスラビアに続く第6位で、「強豪に交り第六位の成績を保つことが出来たので皆大喜び」であった（写真17、18、19）⁸⁸⁾。木本町では、有本が「郷党の声援鳴りやまぬ中を健闘善戦」したと報じられ、木本神社では午後8時に「必勝祈願祭」が「厳粛に」執り行われた⁸⁹⁾。

第二日目（鉄棒、鞍馬、吊輪、平行棒）の11日には、町のラジオが「終日開けっ放しの緊張ぶり」であった⁹⁰⁾。日本チームの成績は、イタリア、ハンガリー、フランスに抜かれ第9位に転落したが、監督の森悌次郎によれば、「不調であったとは言え、前回二位であったアメリカを抑へたことが我日本体操競技の躍進的發展を如実に物語るものであ」った⁹¹⁾。試合開始とともに「一睡もとらず」に「我子の成績」を気に掛ける有本の母・きくの「涙ぐましい神信心」は、「町の人々の涙を誘」った。彼の親族は、「胸は遙るけき異郷の空に飛んで、食事も咽喉を越さぬ」状態であった。町民は、「体操有本へ吸ひつけられて」いた。「じれったい」電波放送を待ち切れずにラジオにへばり付いて「耳そば立てる」町民の「不言の声援と熱狂ぶり」は、「木本町未曾有のもの」であった⁹²⁾。

有本は、体操チームの中で、武田、野坂に続く「好調を示し、多くの先輩を抜く偉動を現はし」た。『紀南新報』によれば、監督の森悌次郎は、「第一日の成績は最初の平行棒の時〔に〕みな上って固くなりすぎ〔て〕やゝ不調であったが、その後好調にもどし活躍。特に野坂、武田、有本選手の出来が非常によかった」⁹³⁾と有本の出来栄を評価している。両親はその結果を知って次のように安堵する⁹⁴⁾。

皆さんのお陰で無事に競技を終ったやうですが、これも皆様各位の御力によるものと深く喜んでいましてです。何せ初めての事であり一番ビリの彼の事でありどんな事をやらすか全く気がかりでなりません。第一日〔目〕、横浜から野坂、武田に続いて好調だといふ報をうけて、ホッとしましたが、全部の競技が終るまで立っても居ても居られませんでした。あちらからもこちらからも大変とお賞めの言葉を頂戴して恐縮しています。まア初陣の手柄とまでは行かぬにしても彼としての責めふさが出来たといふもので、これでどうやら肩の荷が

下りた感じがいたしました。

オリンピック出場が決定して以降、我が子・有本のために「心労を続けて来た」両親の顔には、「流石に喜びの色が溢れて」みえていた。有本が競技を終えると、親族は氏神や比音山清水寺（通称「泊観音」）にお参りを済ました⁹⁵⁾。有本は8月16日、オリンピック村出発を前に紀南新報社に次のような手紙を送る⁹⁶⁾。

私共は、約一ヶ月半の村の生活も終へて明日（十七日）此の思ひ出多き村と別れることになりました。各国の選手と共に人種の差別を離れて楽しかった。此の村は、選手にとっては一生忘れる事が出来ない思ひ出となることと思ひます。私共体操の試合の結果については皆様が新聞で見られた通りですが、欧州の各国が体操の本場で体操を国技としてをる位で、我が日本のやうに四、五年前から始めた国なんかとは問題ではありません。而し日本の上達の早いのは驚いていました。他の競技は皆様が新聞で見た通

りです。

私共体操部は、明日ベルギーを通してロンドンに行き、ロンドンからパリーへ飛行機で、パリーから体操の本場スイス、それからローマに、そして二十七日マルセイユ、そして懐しい日本へ、知らぬ他国に来て言葉が判らず毛色の変った人間ばかりなので、早く日本に帰って日本語で買物がしたくなりました。では故郷の皆様サヨナラ。（村を離れる最後の日、有本彦六）

有本は、オリンピック村での1か月半の生活について、「人種の差別を離れて楽しかった」ことを取り上げて、「一生忘れる事が出来ない思ひ出となる」と振り返った。また、欧州各国の体操のレベルを評価しつつも、各国が「日本の上達の早いのに驚いてい」たことも報告している。有本は、ハンガリーとの試合では自分たちの練習や考えに迷いが生じたが、チェコやその他の国々との試合及び交流では自信を得たようである（写真20, 21）。



写真16. オリンピック村での片手倒立
提供：駅前・木本町まちづくり推進委員会



写真17. 日本代表チーム（左端）
出典：『器械体操写真大鑑』

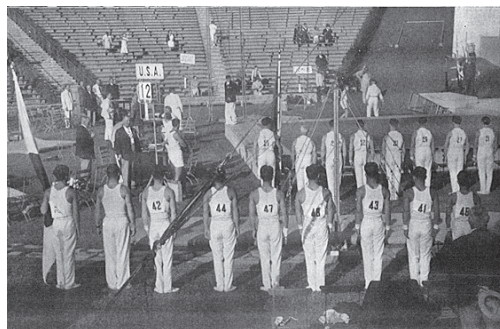


写真18. 日本代表チーム（背番号41番）
出典：『第十一回オリムピアード写真帳』



写真19. 日本代表チーム（中央）
出典：『第十一回オリムピアード写真帳』

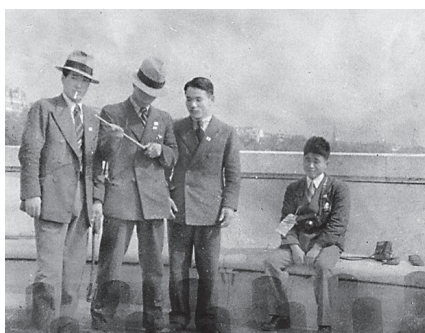


写真20. 三宅、武田、有本、曾根
所蔵：オリンピックスポーツ文化研究所



写真21. 大英博物館前
提供：駅前・木本町まちづくり推進委員会

5. 日本への帰国と木本町への帰郷

日本選手団は1936（昭和11）年10月2日午前9時頃に神戸港に到着、実に4か月ぶりの帰国を果たした⁹⁷⁾。選手団は神戸、大阪において歓迎会に出席し、翌3日午前8時に東京駅に到着した。有本も「頗る元気」で、親族らの出迎えを受けた⁹⁸⁾。彼を含む選手団は、皇居と明治神宮を参拝した後、オリンピック後援会が主催する歓迎会に出席し解散した。10日には日比谷公会堂における実演会に参加⁹⁹⁾、14日には木本町へと戻ることとなった。『紀南新報』によれば、帰国した有本は、「他国〔の〕選手とても術の上では大した相違はない。来るべき〔4年後の1940（昭和15）年〕東京大会には我代表としては大丈夫負かすだけの自信があり、帰朝に気を緩めず大いに精進している」と「心強い決意」を語った¹⁰⁰⁾。彼は、帰国した時点で、次回1940年東京オリンピックで雪辱を果たす決意とその自信を既に持っていたのである。

紀南新報社が、有本が無事に帰国した旨を実家に知らせると、家族は、「成績はともあれ無事に役目をすまして帰ったことは幸〔い〕でした。十三、四日ごろ一度帰ってくるといふ通知が来ていますが、何から何まで皆さんに御世話〔に〕なり御心配をかけて有難う御座いました。どうか御紙を通じて皆様に厚く御礼を申して下さい」と語った。我が子に対しては、「あちらの国のものばかり喰っていてさぞ窮屈であったろう」と慮り、「何はともあれ手作りの御馳走準備など、それはくの喜び」であった¹⁰¹⁾。

10月14日午後2時30分、有本は巡航船で木本港に到着、凱旋を祝福して同町の議員、木小及び木中の児童・生徒、町民らが出迎えた。ブレザーコートを身に纏い「輝かしい」彼は、出迎えの観衆に「一々挨拶を繰り返へしつゝ」木本神社へ参拝した。有本は、助役の「熱誠あふれる」歓迎の挨拶に対し、「涙をもって」感謝、助役の発声で万歳三唱が行われ、実家へと戻った¹⁰²⁾。4か月ぶりに帰った実家では、待ち受けた友人の「矢攻めの歓迎会」が行われ、「内気な」彼は「アルコールには全くもてあまします」と述べ、オリンピックの経験を語る¹⁰³⁾。

六月二十日に日本を出発してベルリンに着いたのが七月三日でした。濛塵のシベリア鉄道にはガッカリしました。途中新京とモスクウで泊っただけでした。ベルリンに着いて八月十、十一両日の大会日までハンガリー、オーストリア、チェッコなどで競技をやって来たが、至るところ我々日本選手に好感をもってくれた事は嬉しかった。大会の結果はドイツ

が優勝し、スイス、フィンランドの順で、日本は前回よりも成績をあげたが、全体の成績はドイツ、スイスの敵ではない。一体に体操選手は体格は小さい。個人競技で一等になったドイツのシクハツマン、スイスのロイス、フィンランドのウォーシキネなども私位のものであった。外国選手の技はやりぶりが大きく華手である。何しろ八年十年も練習を積んでいる連中ばかりで日本としても将来練習を充分にすることが大切である。ドイツとかスイスとかと体操技術の相違は、今のところ一段の差はあるにしても、要は訓練である。第十回の時に比べて著しく進歩している証左は、向ふの連中が我々の術を見て、日本選手は驚くべき進歩ぶりだとお世辞でないところの驚嘆をしていた事でも判る如く、来るべき大会にはより以上の成績をあげていきたいと選手の何れも折角自重しているやうな訳ですから、楽しんでいて貰ってよい訳です。

有本は、体操競技の選手は一般に体格が小さいが、外国の選手は日本の選手と比べて「やりぶりが大きく華手」なので、日本は「練習を充分にすることが大切」と主張していた。確かに、現状の日本の力は優勝国・ドイツや先進国・スイスと比べれば劣るものの、「訓練」次第では今回以上の成績を収めうると考えていた。有本の考えに関し、後に彼の教えを受けることになる深井一三は、彼がベルリンオリンピック帰国後に次のように語ったと回顧する¹⁰⁴⁾。

当時は外国からの文献がなによりの指導書で、翻訳に苦労しながら試行錯誤の技術練習であったが、ある時、指導書の翻訳から棒下宙返り（平行棒運動）というわざがでてきた。新しい技ということで真剣に練習をかさね、このわざに熟練してくると、宙返りの体が棒上にはみだしてしまう。しかし訳語どおり棒下で宙返りをしないと解釈違反になるということで、無理に棒の下でまわる宙返りを練習してベルリン〔オリンピック〕に参加した。ところが、ヨーロッパの優秀な選手はみんな棒上に体がとび出すスケールの大きな棒下宙返りを実施しているのを見て唾然とした。訳語に忠実なあまり形ばかりにとられ、それに当てはめようとする日本の指導や練習は反省すべきだ。また選手も主体性・自主性をもつことが大切で、それには“わざの本質”を理解した考える練習に変えなければならない。

深井によれば、有本は、ベルリンオリンピックで目にした経験をもとに、翻訳に忠実であるがゆえに「形

ばかりにとらわれ」たり、翻訳に「当てはめよう」としたりする、日本の体操技術に対する練習法を改めようとしていた。彼が考えた1940年東京オリンピックでの戦勝法は、主体的かつ自主的で、わざの本質を理解した「考える練習」を積み重ねていくべきだ、というものであったのである。

10月17日午後5時から7時には同町公会堂で町民会・青年団・木中同窓会共催の「歓迎会」が開催された。出席者は250名余りで、青年団長による開会の挨拶の後、皇居遙拝、町長による「熱誠あふれる」歓迎の挨拶、木中校長の國保をはじめ木小校長、紀南新報社社長、オーションクラブ代表が有本の功績を讃えた。歓迎を受けた彼は、「御期待に添ふことの出来なかった事は申し訳ないが、来るべき〔1940年〕東京オリンピック大会には、事情の許す限り郷土熊野のため国家のために奮闘御期待に副ふ決心であります」と、4年後の東京オリンピックへの決意を述べた¹⁰⁵⁾。

有本は、10月19日に横浜市等が主催する「オリンピック選手歓迎会」に出席し、22日前後に再び帰郷し、11月8日に名古屋市における「東海体操会」に出場する木中生のために指導を行う予定となった^{106) 107)}。11月6日付の『紀南新報』では、2日後の8日に鳴海球場で開催される東海三県体操大会に三重県より出場を推薦された木中体操部が、「彦六君のコーチをうけ猛練習を積んでいる」と報じられている¹⁰⁸⁾。彼は、体操競技の指導者としても歩み始めたのである。7日早朝、鳴海球場へと出発する彼は、木中体操部への期待を次のように語る¹⁰⁹⁾。

加知先生がいろいろ都合があって出られないといふのでその代理を仰せつかったのですが、僅かの練習を見て大いに心丈夫に思っています。ホンの付添ひといふことでお伴する訳です。私の口からこういっちゃ失礼ですが、県下の学校でもこれ位に技術を修めてる学校はありますまい。たしかに好成績を収めて帰ると思っています。

『紀南新報』によれば、木中体操部員は、「オリンピック選手〔である有本〕の付添ひで初舞台に出られるとあって何れも意を強うしていた」¹¹⁰⁾。有本の指導者としての第一歩は、木中時代の恩師・加知に任された後輩の引率だったのである。翌々日の9日には、大会に出場した体操部員が木中に帰って来た。引率した有本は、大会における木中体操部員の活躍を、次のように語る¹¹¹⁾。

実に美事でした。木中の選手出場科目は跳躍と鉄

棒の二種でありましたが、実に堂々たるもので他の学校に比べて些かの遜色はないと思ひました。特に畑井、小倉君の技術は一等にすぐれていたやうに思ふ。丁度オリンピックと一緒にいった野坂、松延君も学生連盟から出ていたが、あゝした体操大会はなるべく毎年やって貰った方がよい。競技でなく大会である関係で技術については採点はありますが、もしこれを採点したものとするれば、木中選手の諸君は相当の好成績を収めていたでせう。しかし、まだ大いに練習を要するところがあるので、選手諸君について話して置きましたが、非常に意義のある会同であった。

有本は木中体操部の演技結果を高く評価した。また、ベルリンオリンピックの同志であった慶應義塾大学卒の野坂浩と東京高等師範卒の松延博が学生連盟出身ゆえに試合経験が豊富なことを取り上げて、他校との試合形式の大会は「毎年やって貰った方がよい」と意見している。3日後の11月12日には、彼と木中体操部員が、御浜町立神志山小学校で実演会を開催することとなる¹¹²⁾。

6. 1940年東京オリンピック出場という夢の頓挫と、体操学校助教授への就任

翌1937（昭和12）年3月5日、「長らく病氣中」であった父・荒太郎が死去、翌々日の7日に葬儀が執り行われた¹¹³⁾。1か月半後の4月25日には、1940年東京オリンピックを見据えた第1回体操競技種目別選手権（吊輪、跳馬）が東京文理科大学体育館で開催された。第一部（一般）には35名、第二部（中等学校）には28名が参加し、「盛況を呈し」た。大会では、新学期の練習不足にもかかわらず選手が「澆刺たる競技振り」を披露した。吊輪の第一部では、有本が「予想の如く円熟した妙技」を発揮、「貫禄を示し」て優勝を果たした¹¹⁴⁾。彼は、5月16日の朝日新聞社主催「日本体操大会」（於：甲子園球場）にも、ベルリンオリンピック日本代表の曾根と野坂とともに「エキシビジョンとして神技を公開する筈」であったが、「練習中の負傷」¹¹⁵⁾が原因で欠場している¹¹⁶⁾。

1938（昭和13）年のある国民体育館での練習の帰り道、佐々野、武田、曾根らは喫茶店に立ち寄った¹¹⁷⁾。喫茶店では、「体操競技の発展と振興に寄与するために協力して技術の研究と修練に励み、後進の指導、育成、援助につとめ、あわせて日体体操部の栄光のために尽力する熱意」のもとで¹¹⁸⁾、誰からともなく「我々のクラブを創ろうではないか」という話が持ち上がった。

た。間もなく、「クラブ名はどうするか」という話し合いが始まり、様々な「名案、迷案」の提案がなされたものの¹¹⁹⁾、曾根らによれば、「軽快に、さっそうと」「世界を翔け巡る」ツバメに因んで武田が、「スワロー」と命名したのだという^{120) 121)}。松本は、有本がスワロークラブの「生みの親」であり、その会報の創刊号に「あかつち」と題した文章が寄稿されている、と証言している^{122) 123)}。このことから、喫茶店での会合には有本も同席していたと思われる。しかし、7月15日には、日中戦争の影響で1940年東京オリンピックの返上が決定し¹²⁴⁾、東京オリンピックでベルリンオリンピックの雪辱を果たす、という有本の目標は、これを以て失われることとなったのである。

1年後の1939（昭和14）年8月には、有本の親友・松本が召集解除となって、神戸の親和高等女学校に赴任、1か月後の9月には、有本が後輩・児山一正¹²⁵⁾の後任として体操学校に赴任した¹²⁶⁾。10月には第10回明治神宮国民体育大会が開催され、有本は、松本、曾根、日野とともに出場した。ベルリンオリンピック日本代表の有本と曾根は「練習不足」のため準決勝で敗退したが、恩師・佐々野は、「彼等の第一人者としての強味は未だ衰へず、明朗化された競技部の指導如何によりては、必ず秀れたる技術が見せられるものと信じ、彼等の今後の努力を乞ふ次第である」と激励を送った¹²⁷⁾。松本によれば、有本は、もともと「あまり酒を飲まない方だった」が、日野は「泡盛を10パイ位平気で飲む酒豪だった」ので、有本は「相当に鍛えられて成長していた」。2人が「青春を楽しんでいたように」見えた¹²⁸⁾。翌年に卒業を控えた部員の浜田靖一は、この頃の有本とのエピソードを次のように回顧する¹²⁹⁾。

季節はいつ頃だったろうか。私は何かの用事で早起きしたことがあった。その日はどうしたわけか深い霧が校庭を重く流れていた。10米位前方に短い片脚の男がジーツと立ったまま動かない。それは何かまだ夢を見ているような不思議な光景だった。勇気を出して近づいてみるとなんと有本氏の片手倒立の姿だった。やがて霧と汗で光った有本の顔が「何だ君か」とあらわれた。

東京オリンピックの返上後、有本は表立って試合に出場しなくなったが、早朝より練習を行い、技術を磨いていたようである。

1939（昭和14）年度の体操学校器械体操部は、「永い光輝ある歴史と伝統とを、維持発展させる」べく「大いに頑張った」。部員は50名を超え、前任の児山

と後任の有本の指導を中心に「日々の練習を積んだ」。その結果、明治神宮国民体育大会をはじめとして、30回以上に及ぶ「優秀なる」実演を披露することとなった¹³⁰⁾。翌1940（昭和15）年に入ると、「往年の覇者」有本と「今や爛熟期に達せん」としていた竹本正男による指導のもとで、「打倒文理大〔東京文理科大学〕のスローガンを掲げて、新学期に入るや猛練習」が始まった。

体操部員は、授業が終了すると「直〔ぐ〕に」集合し、有本と竹本の指導を仰いで鞍馬に、平行棒に、鉄棒にと全種目の練習を行い、「夕食の鐘の音を聞きつゝ、尚必死になって器械にかじりついた」。夕食と風呂を済ませて「ホットする間も無く」、「点呼が終るか終らぬ」かのタイミングで道場に集合し、再びタンブリングに徒手に「疲れた体に鞭打って技術を錬磨」し、「日体〔すなわち体操学校〕独特の不屈の精神」を養った。設備が不完全な体操学校では「充分なる練習」ができないために、毎週水曜日の夜は、文理大体操部員とともに国民体育館で「新種目の研究に時の立つのを忘れ、閉館のベルの音にハッと気が付いてうらめしいそうに時計を見上げ」た。

体操学校が「かくの如き猛練習を為さねばならぬ」理由は、部員が少なく修業年限も短いことにあった。体操学校では、ほとんどの学生が在籍する高等科の修業年限が2年であるが、1年次には「色々の関係で充分なる練習が出来ず」、2年次には「漸く技術が軌道に乗って来たと思った途端に、早くも卒業」が見えてきてしまう。体操学校の体操部員は、部員数も多く修業年限も長い文理大に対抗するためには「猛練習によって補ふより外は無い」と理解し、「技術は〔文理大よりも〕やはり日体の方が優れている」と自信に満ち溢れていた¹³¹⁾。

また1940（昭和15）年には体操学校女子部の体操部も創設された。女子部員は、男子部員、竹本、そして、有本の「熱心なる」指導を受けて「他の事はわすれて毎日平行棒、平均台を友として」学生生活を送った。その結果、第11回明治神宮国民体育大会の第1日目では平均台と跳馬で「共に良成績」を記録し、第2日目では平行棒と鉄棒で「皆日頃の自力」を「充分に発揮」することができた。卒業を間近に控えた女子部員らは、後輩に対し、「外形より内容」に拘ることにによって「初めて真の美は美しい線によって現れる」と言葉を贈った¹³²⁾。1936年ベルリンオリンピック以来の、主体的かつ自主的で、技の本質を理解した「考える練習」を積み重ねていくべきだ、という有本の教えは、着実に成果を上げつつあったのである（写真22、23）。



写真22. 1941 (昭和16) 年度の器械体操部 (男子)
(1列目右から4番目)
出典：『器械体操写真大鑑』



写真23. 器械体操部 (女子) と松本
(1列目左)
所蔵：オリンピックスポーツ文化研究所

7. 幸せな日常とその終焉、そして、戦後

1941 (昭和16) 年2月、松本は、第一高等学校 (現・東京大学教養学部) に就職したために、有本が世帯を持っていた自由が丘のアパート近くに引越した¹³³⁾。有本と松本の職場はそれぞれ違ったが、二人は、練習から就寝まで生活をともにする日々を過ごした。松本は、終業後、第一高等学校の最寄り駅である東大前駅から渋谷・玉川線の電車に乗って桜新町駅で降り、徒歩で体操学校へと向かうのが日課であった。3月には日本唯一の民間体育指導者養成機関であった日本体育会体操学校が専門学校に昇格、日本体育専門学校 (以下、専門学校) と称されるようになった¹³⁴⁾。11月22日には、財団法人日本体育会の創立50年記念式典が挙行され、学生が体操4つ、行進遊戯2つ、教練1つを披露した。有本は、「転回運動」と題した体操を指揮した¹³⁵⁾。

普段の練習が終了すると、有本と松本は、寮委員の学生に体操学校前の菓子屋で「サッカリンか何かで甘味をつけたゼリーともプリンともいえない菓子」を買ってきてもらい、学生と一緒に食べた。体操学校からの帰途は、等々力駅まで歩いて電車に乗ったり、桜新町駅から溝の口駅まで電車に乗ったりして自由が丘まで帰った。有本の妻・ソノは東京近郊出身で、2人は恋愛の末、1942 (昭和17) 年3月27日に結婚、6月29日に長男・仁を授かった¹³⁶⁾。松本が夕食を済ませ、タオルを持って有本とソノが暮らすアパートに行くと、生まれて間も無い長男・仁が、一升瓶に湯を入れた代用の湯たんぽにくるまって眠っていた。2人は「適当にだべって」銭湯に行く。帰りは、気が向くと再び有本のアパートに立ち寄って深夜まで話し込んだ。有本と松本の「夜の日課」であった¹³⁷⁾。有本のアパートには、松本はもちろん、学生も「暮ってよく遊びに来

た」ために、妻・ソノは「[有本がベルリンで購入してきた] 自慢のコンタックス」を何度も質屋に入れたようである。松本によれば、有本は、「子弟の純粋な交わりの前には、経済観念など問題にしない男」であり¹³⁸⁾、皆で「日々楽しくやったもの」であった (写真24, 25)¹³⁹⁾。4月以降には、専門学校が国防部・武道部・鍛錬部で構成される報告団の新しい体制を組織し、有本は鍛錬部の体操班の班長を務めた¹⁴⁰⁾。

1943 (昭和18) 年6月の土曜日には、日比谷公園で成人を対象として鉄棒をはじめとする体操指導を行ったが¹⁴¹⁾、7月1日には大日本帝国海軍の臨時招集を受けて、集合場所の呉海兵団に参着し、海軍二等整備兵に任じられた (写真25)。7月12日には詫間 (香川県) 海軍航空隊に配属され、10月16日には海軍一等整備兵に任じられた。有本と木中の同級生だった峪口時寛という人物は、同年暮れの彼との偶然の再会を次のように回顧する¹⁴²⁾。

海軍予備学生として、予備士官教育の受験の時偶然大竹海兵団で遭ったが、互いに驚き、懐かしさで過去の思い出やら、このテストに合格したら恐らく来年中に南方で海の藻屑になるだろう等と話し合ったが、当時、応召兵の一兵卒であった二人は軍律に縛られた身が長時間喋り合うことも俚ならず、当時の雰囲気からどうせ生きて木本の浜を歩くこともなからうと握手して、互いの兵舎へと別れてしまった。

海軍予備学生として予備士官教育を受けるための受験の際、二人は三重県出身だったために広島県呉市周辺で再会を果たしたと考えられる。彼等が「テストに合格したら恐らく来年中に南方で海の藻屑になるだろう」と語り合っていることから、この時期の日本の戦局がどれほど悪化していたかが理解される。有本は

テストに合格し、翌1944（昭和19）年1月28日に予備学生（防備専修）採用予定者として、従来、海軍兵学校（江田島）で4か年に及んで実施してきた士官教育を1か年で修了させる海軍機雷学校（後に、海軍対潜学校へと改称）¹⁴³⁾への入校を命じられた。そして、3日後の2月1日には海軍兵科予備学生と海軍対潜学校（横須賀市久里浜）第4期生として入校を命じられ、5分隊3区隊17班に配属された（写真26）¹⁴⁴⁾。有本のひととなりについて、同じ17班に所属した奥野寛一という人物は日記に次のように記している¹⁴⁵⁾。

有本彦六学生、この人は我が班の長老である。年は三十歳であって、日体大〔体操学校〕を卒業し同校に於て教師をしていた。ところが招集を受けて海軍に入り、普通の補充員として、例のきびしい訓練のしかたで鍛えられ、一等水兵となって飛行場に行き、その整備員として働いていたのである。その時、我々の予備学生の試験が行われたので受験し、めでたくパスして対潜学校に來たのである。

彼はとても「人のいい人」である。威張ることもしなければ、自分の経験を誇りもしない。私はとても辛い目に会って來たのですよ。と言う事もない。人の悪口は絶対に言わない、いつもにこにこして誰にでも親切にする。極めて謙虚な、実に尊敬すべき人である。

彼も早や飯、サッと一緒に煙草盆に行く。彼も熱い風呂が平気、私も平気、皆んな入れないでいても、二人は悠々と入っている。いつも一緒に行動しているのだが、私は、つい最近まで彼が前のオリンピック大会に、選手としてドイツに行った事を知らなかった。その帰途、体操をやりながら欧州各地をまわって來たのだそうである。私は有本学生を尊敬している。敬語をつけて呼びたいが、我々にはそれは許されず、有本と呼ぶときもあるが、心の中ではいつも尊敬の念を持っている。

彼には奥さんと、三つになる可愛い男の子とがある。写真をよく見せて貰ったが、奥さんはとてもきれいな人で、たぶんロマンスがあることだろうと思われるが、彼はそれ得意になってしゃべることとは、しないのである。我が十七班の長老である。

夏のある日、有本は、スワロークラブに「『面会OK』の便り」を送った¹⁴⁶⁾。松本は、有本の愛弟子である教官・鈴木登美子や体操部の学生を連れて有本に会いに行った。松本らは、海軍が契約していた民家の面会部屋で持参したアルバムなどを囲んで数時間歓談した。8月6日に完成したとみられるアルバムは、全

38ページで構成され、松本や鈴木をはじめ器械体操部員の練習風景などが収められている（写真27、28）^{147) 148)}。最後に有本は、鈴木に対し「器械体操で教えるべきことは、全部教えた。あとは、女子として、お前自身が女子体操の道を開拓していけ」と伝えた¹⁴⁹⁾。鈴木たちにとっては、それが有本との最後の別れとなった。間もなくして有本が出征となった。東京を離れる日駅に、見送りに來た松本に対し有本は、「俺が死んだら骨を体育館に埋めてくれ」¹⁵⁰⁾ と言い残した。松本にとってはそれが「心の友彦六」との今生の別れとなった（写真29）¹⁵¹⁾。

12月25日には海軍少尉に任じられ、呉防備戦隊司令部付を命じられた。12月27日には第36号海防艦、29日には海防艦・稲木、1945（昭和20）年1月27日には海防艦・竹生、2月27日には第18号海防艦、3月22日には海防艦・金輪、4月10日には第41号掃海艇への乗艦を命じられた¹⁵²⁾。妻・ソノの回想を義娘・一美が伝聞したところによれば、木本を発つ日、幼い長男・仁を連れ、また、妊娠約7か月の長女・朋子を身籠りつつ駅に見送りにきたソノを前に、有本は、日本は戦争に負ける、と言い残したという^{153) 154)}。そして、4月25日、彼は台湾北方（北緯26度59分東経121度30分）の海上で敵潜の攻撃を受けた末、第41号掃海艇とともに海底へと沈んだとされる^{155) 156)}。享年29であった。有本の階級は戦死のため1階級特進の中尉となっている¹⁵⁷⁾。

有本の戦友・奥野寛一は、戦後、「今でも彼は生きて、奥野学生ががんばろう！！と励ましてくれます。終生忘れることのできない立派な人物です」と語った¹⁵⁸⁾。また、愛弟子の鈴木登美子（1944年卒）は、1947（昭和22）年以降の4年間、国民体育大会や全日本選手権を制覇し続けた¹⁵⁹⁾。竹本正男（1940年卒）は、戦後、有本の得意技・片手倒立を「立派に受け継い」で「キメ技」とし1952年ヘルシンキオリンピックに出場、跳馬で銀メダルを獲得し団体で5位入賞を果たした¹⁶⁰⁾。上迫忠夫（1942年卒）も、同オリンピックに出場、徒手で銀メダル、跳馬で銅メダルを獲得し団体で5位入賞を果たした¹⁶¹⁾。言葉遣いや笑い方まで有本に似た深井一三（1943年卒）は、同オリンピック候補に選出された後、中京大学体操競技部監督に就任¹⁶²⁾、有本の故郷・木本町出身で、1972年ミュンヘンオリンピックと1976年モントリオールオリンピックに出場した笠松茂を育て上げた¹⁶³⁾。有本とともに1936年ベルリンオリンピックに出場した三宅芳夫が亡くなった際、深井は次のように語る¹⁶⁴⁾。

現代の競技スポーツには、クリエイティブできる選手の育成が重要でありましょう。創造的な活動には、

自主的で忍耐強い努力が必要で、スポーツ活動には、“数をかけろ”“やってやってやりまくれ”といった言葉が多くて、非科学的とみられやすいが、これは、考えて数をかける意味であって、その過程には、諸科学の導入や諸情報の獲得が重要なのであって、忍耐的な努力や意欲的な関心に伴わないところに、創造的な活動は育たないことになりましょう。

1936年ベルリンオリンピック帰りの有本の教えは、主体的かつ自主的で、わざの本質を理解した「考える練習」を積み重ねていくべきだ、というものであった。有本のこの教えは、戦後、愛弟子が中心を担う日体スワローによって「諸科学の導入や諸情報の獲得」という最新の思考が取り入れられつつ発展的に受け継がれ、「体操ニッポン」の礎となっていったのである。



写真24. 助教授として参加した水泳実習（1列目中央）
提供：駅前・木本町まちづくり推進委員会



写真25. 1943年度器械体操部（2列目右から6番目）
出典：『体操競技写真大鑑』

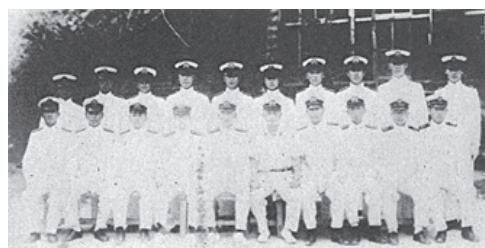


写真26. 海軍対潜4期5分隊3区隊17班（1列目左端）
出典：『波：海軍対潜四期記念文集』

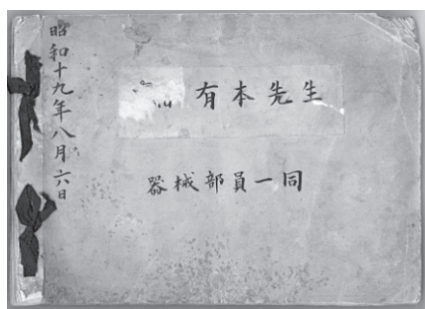


写真27. 有本に贈られたアルバム
所蔵：オリンピックスポーツ文化研究所



写真28. 有本に贈られたアルバム
所蔵：オリンピックスポーツ文化研究所



写真29. 1944年出征時（中央）
所蔵：オリンピックスポーツ文化研究所

おわりに

有本は、木中時代より、いわゆる文武両道で、同級生や下級生には尊敬され、教師には信頼される人物であった。このことは、有本が、5年間で3割5分の生徒が落第した中で卒業と進学を果たし、5年次には競技部主将として校内陸上運動会や近隣中学との対抗戦で優勝している事実からもうかがい知ることができる。木中競技部初代顧問の加藤と2代目顧問の加知は体操学校出身で、彼は、鉄棒が得意といわれた加知に学んだ。また、競技部の先輩は、5個上が1名、3個上が1名、2個上が2名という割合で体操学校出身者であった。もともと器械体操が得意だったと思われる有本は、競技部の活動を通して体操学校出身者と関係を深めるなかで同校への進学を決意したとみられる。

有本が体操学校に入学した年は、日本の体操競技がロサンゼルスオリンピックに初出場を果たした翌年であり、器械体操部監督はその雪辱を果たすべく燃え上がる佐々野であった。もちろん器械体操部に入部した有本は、松本をはじめとして気の合う同期3名とともに血の滲むような練習を続けた。松本によれば、片方の手を負傷した有本がもう片方の手を使って日本で初めて片手倒立を完成させたのは、体操学校在学中の出来事であった。彼は、当初、ベルリンオリンピックに出場できるとは全く思っていなかったが、第2次・第3次予選を通過するに連れ、次第に出場への想が強くなっていったように見える。最終予選では2名の選考委員が揃って「猛練習」と賛辞する程の練習を積んだ有本が、技術面での急成長を遂げ、ギリギリのところでベルリンオリンピックへの切符を掴んだ。故郷・

木本町はもちろん、三重県初のオリンピックの誕生に町中が歓喜した。故郷・木本町の激励を受けた有本は、落選した恩師や同期の無念はもとより、木本町の人々の期待や4年後の日本体操界の命運を背負うまでに成長していったのである。

有本にとって、オリンピック村での1か月半に及ぶ生活は、「人種の差別を離れて楽し」く「一生忘れる事が出来ない思ひ出」となった。ベルリンオリンピックでの人種差別の否定はナチ・ドイツの一時的な戦略だったとはいえ、彼は人種差別を排除した平和の祭典の一端に触れたのである。有本は、ハンガリーとの試合では自分たちの練習や考えに迷いが生じたが、チェコやその他の国々との試合及び交流では自信を得たようである。有本は、帰国した時点で、次回東京オリンピックでベルリンの雪辱を果たす決意とその自信を有していた。その戦勝法は、わざの外形や翻訳に執着する練習方法ではなく、主体的かつ自主的で、わざの本質を理解した「考える練習」を積み重ねていくべきだ、というものだったのである。

ベルリンオリンピック以降、有本は、選手として東京オリンピックを目指し、指導者としても歩み始めた。帰国後には佐々野らとスワークラブを創設した。有本は、翌年の第1回体操競技種目別選手権（吊輪）で「円熟した妙技」を披露し優勝、東京オリンピックに出場するに幸先良いスタートを切っていた。しかし、日中戦争の影響で東京オリンピックが返上され、彼のベルリン以来の目標が立ち消えることとなった。有本はそれ以降、体操学校器械体操部員の指導に注力していった。松本によれば、有本は大日本体育協会等の役職には一切就任せずに、体操学校の助教授であり続けた。彼は、地位を望む学生ではなく、体操競技の実力を備えた学生を育成しようとした。また、技術を向上させるためにはどうすればよいかと学生に尋ねられると、手の指を折って見せ、技術向上の秘訣は練習の回数と努力しかないことを示したという^{165) 166)}。学生は、服装等に対し何ら関心を持たず、「ただ一途に体育の道に精進」する有本のことを「ポロシャツ」と呼んだ¹⁶⁷⁾。その有本が指導を行う体操部では、打倒東京文理科大学が掲げられ、修業年限も部員数も劣る同大とどう戦うかが説かれた。体操部では、「技術」向上に拘る「猛練習」が重ねられた結果、部員には「日体独特の不屈の精神」が養われていったのである。

有本は、彼を慕う体育専門学校（旧体操学校）の学生、親友の松本、そして、愛する妻・ソノと仁に囲まれ、幸せな日々を過ごした。しかしそんな日々も長くは続かなかった。1943（昭和18）年7月に大日本帝国海軍の臨時召集を受けて以降、彼が体育専門学校の体

操競技場に戻ることは無かった。「俺が死んだら骨を体育館に埋めてくれ」、松本にそう遺言を託した有本は、1945（昭和20）年4月25日に台湾北方海上で敵潜水艦の攻撃を受け、愛する妻・ソノの写真とともに船体もろとも冷たい海の底へと沈んだ。妻・ソノ、長男・仁、妻のお腹の中の長女・朋子という3人の家族を想いつつ、有本は、29歳という若さで無念の死を遂げたのである。死後、彼の遺言が実現することはなかったが、有本彦六という日本が誇ったジムナストは、生前に関わった人々の心の中で、そして、日本体育大学の体操競技場で確かに生き続けたのである。

以上のように有本彦六の生涯を跡付ければ、彼が残したという「日体スワローの魂」とは、体操の地位を欲望したりわざの外形を追求したりする姿勢ではなく、それと真摯に向き合い、主体的かつ自主的にわざの本質を捉え、かつ、圧倒的な練習量を確保することによってその技術向上を追究する態度であったといえよう。「此の精神の脈々として生きている間は日体スワローは必ずや日本、否、世界の体操競技会に君臨することをお誓いする」¹⁶⁸⁾、冒頭引用した親友・松本徳一の「慰霊辞」はそのように締めくくられるのであった。

【付記】

本稿は、日本体育大学オリンピックスポーツ文化研究所プロジェクト1「日体大とオリンピック・パラリンピック」の成果の一部である。1年半に及ぶ調査にあたっては、特に、有本彦六氏の義娘・一美氏、有本氏の親友・松本徳一氏の御家族様、元東京新聞／中日新聞編集委員・加藤行平様、駅前・木本町まちづくり推進委員会関係者の皆様、三重県立木本高等学校（現熊野青藍高等学校）教職員の皆様、三重県熊野市立木本小学校教職員の皆様、防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室調査員・横山久幸氏に多大なる御協力を賜った。記して感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

- 1) 『南紀新報』1957年3月23日付, p.1.
- 2) 『南紀新報』1957年4月4日付, p.2.
- 3) 同上.
- 4) 『南紀新報』1957年3月23日付, p.1.
- 5) 『南紀新報』1957年3月15日付, p.2.
- 6) 『南紀新報』1957年4月2日付, p.2.
- 7) 同上.
- 8) 『南紀新報』1957年4月4日付, p.2.
- 9) 同上.
- 10) 糸川清（1958）「故有本彦六君：追悼の辞」（日本体育大学オリンピックスポーツ文化研究所

- 所蔵)。
- 11) 『南紀新報』1957年4月4日付, p.2.
- 12) 『南紀新報』1957年4月7日付, p.1.
- 13) 曾根幹子(2016)「日本人戦没オリンピック名をめぐる混乱とその真相：ベルリンに届けられた大島鎌吉の作成名簿更新の試み」『広島国際研究』広島市立大学国際学部, 22:117-130.
- 14) 『東京新聞』2015年11月8日付, p.30. 『東京新聞』2015年11月10日付, p.30.
- 15) 「改正原戸籍謄本」(有本一美氏提供)。
- 16) 甥(執筆年不詳)「『おばあさん』有本あき乃」。
- 17) 三重県立木本中学校(1940)『創立二十周年史』三重県立木本中学校, p.20.
- 18) 同上書, p.28 i, ii.
- 19) 同上書, p.37.
- 20) 同上書, p.37.
- 21) 同上書, p.12.
- 22) 同上書, p.16.
- 23) 同上書, p.23. 「人名及略歴一覧表：昭和五年三月男子部女子部卒業生」(日本体育大学百年資料室所蔵)。「卒業予定者名簿：昭和8年3月」(同上)。「卒業予定者名簿：昭和9年3月」(同上)。「卒業者名簿：昭和10年3月」(同上)。
- 24) 前掲, 『創立二十周年史』, p.70.
- 25) 峪口時寛(執筆年不詳)「故有本彦六氏を偲ぶ」『流れ谷』流れ谷同志会, p.9.
- 26) 同上.
- 27) 前掲, 『創立二十周年史』, p.20.
- 28) 『紀南新報』1932年8月26日付, p.3.
- 29) 『紀南新報』1932年9月28日付, p.3.
- 30) 『紀南新報』1932年11月2日付, p.3.
- 31) 前掲, 『創立二十周年史』, p.39.
- 32) 木下秀明(1973)『学校法人日本体育会：日本体育大学八十年史』学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編集委員会, p.46.
- 33) 松本徳一(1971)「戦死した名選手：有本彦六」『新体育』新体育社, 41(9):110.
- 34) 前掲, 『学校法人日本体育会：日本体育大学八十年史』, p.699.
- 35) 前掲, 「戦死した名選手：有本彦六」『新体育』, 41(9):110.
- 36) 同上.
- 37) 松本徳一(1957)「慰霊辞」。
- 38) 朝日新聞社編(1936)『「われらの選手」オリンピック代表点描』朝日新聞社, p.153.
- 39) 前掲, 「戦死した名選手：有本彦六」『新体育』, 41(9):110.
- 40) 『紀南新報』1936年6月9日, p.3.
- 41) 日本スワロー編(1978)『体操競技写真大鑑』, p.544.
- 42) 前掲, 「慰霊辞」。
- 43) 全日本体操連盟(1937)「体操」『第十一回オリンピック大会報告書』大日本体育協会, p.159.
- 44) 『紀南新報』1934年8月8日付, p.3.
- 45) 遠山喜一郎(1995)「第11回ベルリン・オリンピック回顧」『日本体操協会60年史』日本体操協会, p.51.
- 46) 前掲, 「慰霊辞」。
- 47) 前掲, 『日本体育大学八十年史』, p.632.
- 48) 前掲, 「戦死した名選手：有本彦六」『新体育』, 41(9):110.
- 49) 前掲, 『第十一回オリンピック大会報告書』, p.160.
- 50) 前掲, 『「われらの選手」オリンピック代表点描』, p.153.
- 51) 佐々野利彦(1970)「松の緑の永久に」『石田城：創立70周年記念号：長崎県立五島高等学校』長崎県立五島高等学校, p.81.
- 52) 前掲, 『第十一回オリンピック大会報告書』, p.161.
- 53) 『紀南新報』1936年5月12日付, p.3.
- 54) 甥(執筆年不詳)「有本彦六さん ベルリン・オリンピック(2)」。
- 55) 『紀南新報』1936年5月14日付, p.3.
- 56) 『紀南新報』1936年5月12日付, p.3.
- 57) 『紀南新報』1936年5月14日付, p.3.
- 58) 高木武夫(1936)「オリンピック大会日本代表：体操選手選抜競技会を観て」『体操』全日本体操連盟, 6(6):p.15.
- 59) 栗本義彦(1936)「出陣体操軍に」『体操』全日本体操連盟, 6(6):pp.5-6.
- 60) 有本彦六(1936)「惜みなく闘はん」『体操』全日本体操連盟, 6(6):p.11.
- 61) 『紀南新報』1936年5月12日付, p.3.
- 62) 同上.
- 63) 『紀南新報』1936年5月16日付, p.3.
- 64) 『紀南新報』1936年5月12日付, p.3.
- 65) 『紀南新報』1936年5月16日付, p.3.
- 66) 『紀南新報』1936年5月30日付, p.3.
- 67) 『伊勢新聞』1936年6月9日付, p.3.
- 68) 『紀南新報』1936年6月9日付, p.3.
- 69) 『伊勢新聞』1936年6月14日付, p.3.
- 70) 『伊勢新聞』1936年6月16日付, p.3.

- 71) 同上.
- 72) 同上.
- 73) 同上.
- 74) 同上.
- 75) 同上.
- 76) 同上.
- 77) 竹内宏二 (2008) 「昭和十一年ベルリンオリンピックに出場された木本町出身の有本彦六さんの思い出」 p.3.
- 78) 本間茂雄 (1937) 「伯林オリンピック体操競技の回顧」『体操』全日本体操連盟, 7 (1) : 13-15.
- 79) 前掲, 「伯林オリンピック体操競技の回顧」『体操』, 7 (1) : 17.
- 80) 『東京日日新聞』1936年7月4日付, p.3.
- 81) 『紀南新報』1936年8月4日付, p.3.
- 82) 『紀南新報』1936年8月7日付, p.3.
- 83) 高橋正彦 (1936) 「日本オリンピック体操軍対ハンガリー戦評」『体操』全日本体操連盟, 6 (9) : 17.
- 84) 『紀南新報』1936年10月17日付, p.3.
- 85) 前掲, 「伯林オリンピック体操競技の回顧 (七)」『体操』, 7 (10) : 27.
- 86) 『紀南新報』1936年8月4日付, p.3.
- 87) 『紀南新報』1936年8月12日付, p.3.
- 88) 大日本体育協会 (1937) 『第十一回オリンピック大会報告書』大日本体育協会, p.168.
- 89) 『紀南新報』1936年8月15日付, p.3.
- 90) 同上.
- 91) 前掲, 『第十一回オリンピック大会報告書』, p.169.
- 92) 『紀南新報』1936年8月12日付, p.3.
- 93) 『紀南新報』1936年8月15日付, p.3.
- 94) 同上.
- 95) 同上.
- 96) 『紀南新報』1936年9月5日付, p.3.
- 97) 『紀南新報』1936年10月2日付, p.3.
- 98) 『紀南新報』1936年10月4日付, p.3.
- 99) 全日本体操連盟 (1936) 「消息」『体操』全日本体操連盟, 6 (11) : 20.
- 100) 『紀南新報』1936年10月14日付, p.3.
- 101) 『紀南新報』1936年10月8日付, p.3.
- 102) 『紀南新報』1936年10月15日付, p.3.
- 103) 『紀南新報』1936年10月17日付, p.3.
- 104) 深井一三 (1974) 「想像と発想の転換」『監督の条件』大修館書店, p.176.
- 105) 『紀南新報』1936年10月20日付, p.3.
- 106) この間, 彦六は, 木小と南牟婁高等女学校に「ベルリンオリンピック大会場写真」と「子鰐の標本」を, 木中に「大会写真」を「教育参考品」としてそれぞれ寄付している (『紀南新報』1936年10月21日付, p.3.) .
- 107) 『紀南新報』1936年10月21日付, p.3.
- 108) 『紀南新報』1936年11月6日付, p.2.
- 109) 『紀南新報』1936年11月8日付, p.3.
- 110) 同上.
- 111) 『紀南新報』1936年11月11日付, p.3.
- 112) 『紀南新報』1936年11月12日付, p.3.
- 113) 『紀南新報』1937年3月9日付, p.3.
- 114) 前掲, 「器械体操 吊環, 跳馬選手権大会記」『体操』, 7 (5) : 41.
- 115) 『紀南新報』1937年5月16日付, p.3.
- 116) 前掲, 「体操選手演技の進況」『体操』, 7 (6) : 36.
- 117) 竹本正男 (1990) 『わが体操人生』記念誌刊行委員会, p.42.
- 118) 佐々野利彦 (1975) 「巻頭言」『日体スワロー』松本徳一, 1 : 122.
- 119) 前掲, 『わが体操人生』, p.42.
- 120) 同上. 曽根道貫 (1975) 「会員の声」『日体スワロー』松本徳一, 1 : 122.
- 121) ただし, 1940 (昭和15) 年に体操学校を卒業した浜田靖一によれば, 1939 (昭和14) 年頃には, 曽根が, スワローという名称からは運動種目も所在地も連想されないので体操学校の所在地をとって「深沢クラブ」にしてはどうか, と提案し, それを使用したことも「深沢倶楽部」を使ったこともあったようである (浜田靖一 (1975) 「スワロークラブのあゆみ」『日体スワロー』松本徳一, 1 : 9.) .
- 122) 前掲, 「慰霊辞」.
- 123) 「あかつち」とは, 器械体操部の練習で滑り止めとして使用した, 体操学校の北方約100mの場所に位置した小高い丘 (通称, 土佐山) の赤土のことであった. 器械体操部の1年生は, バケツを持ってその丘に登り, 良質の赤土を掘ってよく乾燥させておくことが仕事であったという (前掲, 「スワロークラブのあゆみ: 鮫州, 浜川とまりません」『日体スワロー』, 2 : 3.) .
- 124) 『東京朝日新聞』1938年7月15日付, p.1.
- 125) 児山は, 体操学校卒業後間もなく器械体操の教員に就任したが, 1940 (昭和15) 年1月佐倉 (千葉県) の連隊に入営 (日本体育会体操学校文芸部 (1940) 「昭和十四年度行事日記」『日本体育

- 会体操学校情報』日本体育会体操学校文芸部，p.96.），2年半後の1942（昭和17）年8月27日に中国大陸で戦死したとされる（スワロークラブ（1953）『器械体操写真大鑑』中日本スポーツ研究会，p.136.）。
- 126) 前掲，「昭和十四年度行事日記」『日本体育会体操学校情報』，pp.96-97.
- 127) 佐々野利彦（1939）「感想」『第十回明治神宮国民体育大会報告書』厚生省，p.386.
- 128) 前掲，「戦死した名選手：有本彦六」『新体育』，41（9）：111.
- 129) 前掲，「スワローのあゆみ：鮫州，浜川とまりません」『日体スワロー』，2：5-6.
- 130) 前掲，「昭和十四年度行事日記」『日本体育会体操学校情報』，p.79.
- 131) 山口生（1941）「器械部」『日本体育会体操学校情報』日本体育会体操学校文芸部，pp.83-85.
- 132) 同上書，p.93.
- 133) 前掲，「戦死した名選手：有本彦六」『新体育』，41（9）：111.
- 134) 米本卯吉（1941）「昇格祝賀会に於ける経過報告」『国民体育』日本体育会，28（4）：4.
- 135) 前掲，「光栄に輝く創立記念式典：閑院宮載仁親王殿下の台臨を仰ぎ奉りて」『国民体育』，28（12）：10，13.
- 136) 「改正原戸籍謄本」（有本一美氏提供）。
- 137) 前掲，「戦死した名選手：有本彦六」『新体育』，41（9）：112.
- 138) 同上書，41（9）：112-113.
- 139) 前掲，「慰霊辞」。
- 140) 財団法人日本体育会（1942）「日体報国団の新陣容」『国民体育』財団法人日本体育会，29（6）：10.
- 141) 東京市（1943）「六月の手帳」『市政週報』東京市，p.16.
- 142) 前掲，「故有本彦六氏を偲ぶ」『流れ谷』，24：9.
- 143) 田中清海（1977）「黄海で護衛任務」『波：海軍対潜四期記念文集』海軍対潜四期・「波」編纂委員会，p.159.
- 144) 海軍対潜四期・「波」編纂委員会編（1977）『波：海軍対潜四期記念文集』海軍対潜四期・「波」編纂委員会，p.vi.
- 145) 奥野寛一（1976）「有本彦六学生」『滯：海軍対潜四期・戦死物故者追悼文集』海軍対潜四期会，pp.79-80.
- 146) 沢正男（1977）「有本彦六先生との最後の別れ」『体操競技写真大鑑』中日本スポーツ研究会，p.137.
- 147) 「器械体操部員が彦六に贈呈したアルバム（1944年8月6日完成）」（日本体育大学オリンピックスポーツ文化研究所所蔵）。
- 148) 前年の1943（昭和18）年に専門学校を卒業し海軍大井航空隊十五分隊に所属していた杉原和光は，松本からの何らかの手紙に対し，「〔有本先生が居られる所は〕随分変な所ですね。有本先生の居られる所は，予備学生でも志願されたのでせうか。何しろ先生は手荒く筆不精ですから返事は頂けぬ事を覚悟して出しました。海軍は訓練が激しいのですが，全て御苦勞様です。アルバムが待遠いですね。でも今月の二十日頃迄に此の方に着かぬ様でしたら送るのを待って下さい。近く家から写真を送りますから受取って下さい。上陸して五を突くと〔有本〕先生の事を思い出しますよ。…中略…思がついたままを（終り）」（「松本徳一宛の手紙（1944年7月）」という返事を送っている。到着が間に合わなかったのか，杉原の写真がアルバムに収録されることはなかったが，後日，彼の写真は松本の元に届けられた。杉原はその後戦死したため，彼の写真は，2024（令和6）年10月26日まで80年間にわたり松本の自宅で大切に保管された。同日，日本体育大学オリンピックスポーツ文化研究所所員の福井元と関口雄飛が松本のご家族より寄贈の依頼を受け，2025年3月現在は同研究所が所蔵している。
- 149) 前掲，「有本彦六先生との最後の別れ」『体操競技写真大鑑』，p.137.
- 150) 前掲，「追悼の辞」。
- 151) 前掲，「戦死した名選手：有本彦六」『新体育』，41（9）：113.
- 152) 「奉職履歴」（厚生労働省所蔵）。
- 153) 「改正原戸籍謄本」（有本一美氏提供）。
- 154) 『東京新聞』2015年11月10日付，p.30.
- 155) 「戦没者調査表（予備士官）」（厚生労働省所蔵）。
- 156) 『海防艦戦記』によれば，有本は第41号海防艦の乗組員として1945（昭和20）年4月25日に「東支那海方面に於て敵潜の攻撃を受け戦死」と記されているが，本研究は，一次資料にあたる「奉職履歴」及び「戦没者調査票（予備士官）」（厚生労働省所蔵）に拠ることとした。なお，第41号海防艦は，その後，6月9日に朝鮮南方海上で敵潜水艦の攻撃を受けて沈没し，乗組員1名を除く173名が死亡したとされる（海防艦

- 顕彰会（1982）「戦死・戦傷死者」『海防艦戦記』海防艦顕彰会，p.511-514. ）.
- 157) 「奉職履歴」（厚生労働省所蔵）.
- 158) 前掲，「有本彦六学生」『滯：海軍対潜四期・戦死物故者追悼文集』海軍対潜四期会，pp.79-80.
- 159) 前掲，『器械体操写真大鑑』，p.194.
- 160) 同上書，p.234, 239.
- 161) 同上書，p.257.
- 162) 同上書，p.208.
- 163) 同上書，pp.594-595.
- 164) 深井一三（1984）「先駆」『中京大学体育学論叢』25（1・2）：49-51.
- 165) 前掲，「戦死した名選手：有本彦六」『新体育』，41（9）：111-112.
- 166) 東京新聞社記者の取材に対し，彦六の愛弟子だった岡本（旧姓鈴木）登美子は，「口数が少なく，練習回数を指折り数えるのが，先生の癖。『できるまで繰り返せ』と言われているようでした。でも，先生がそばにいてくれれば，大けがの危険がつきまとう練習も怖くなかった」と語っている（『東京新聞』2015年11月10日付，p.30. ）
- 167) 前掲，「慰霊辞」.
- 168) 同上.